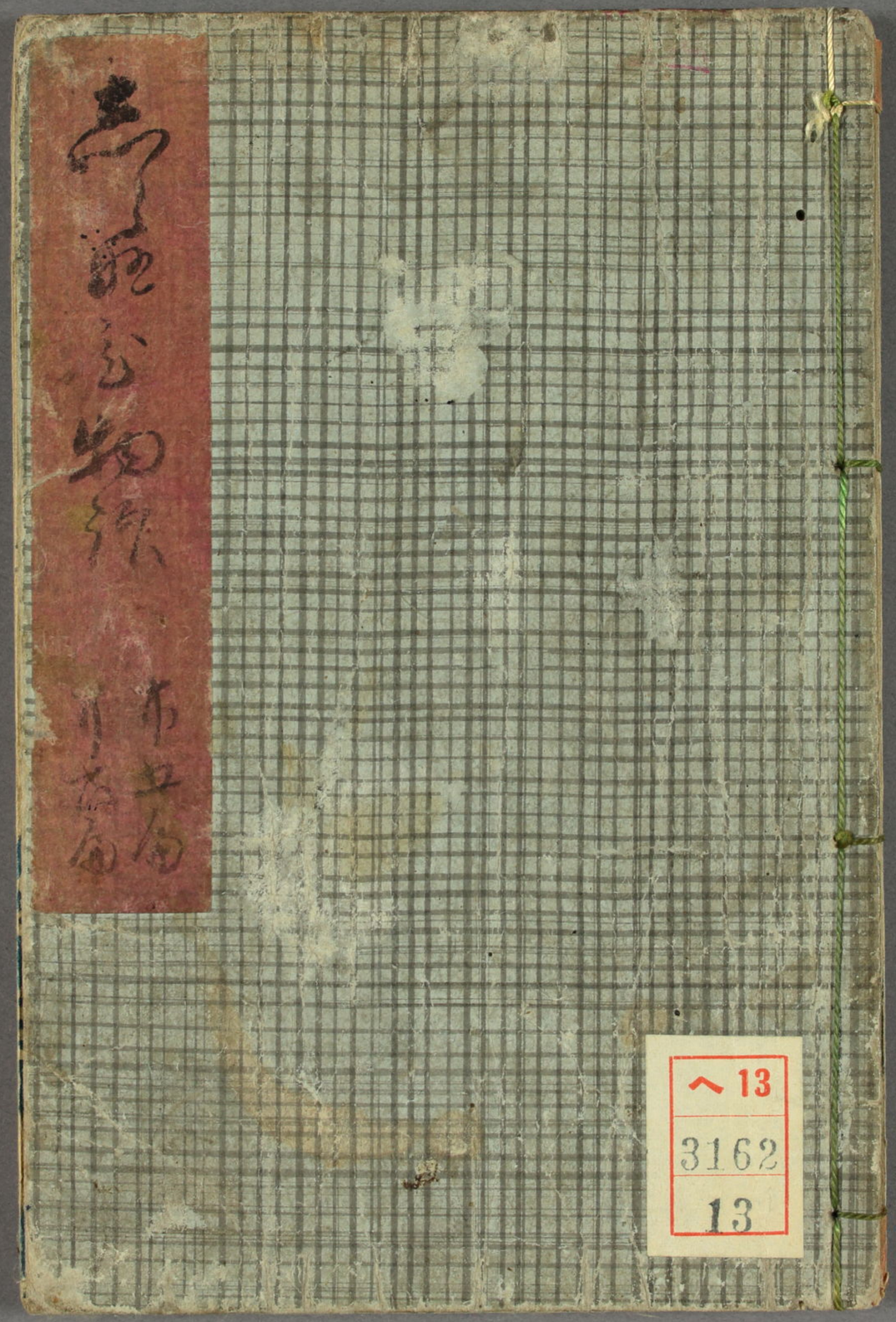

へ13
3162
13

# 白縫譚廿五編

上集

種員作

國貞画

柳下亭版

白酒
廿五編上
廿五編下

# きぬ火物語廿五編下

種員作
國貞画

柳下亭

へ 13
3162
13

昭和九年十月二日 購求

男風呂の鏡戸に韓信の股潜を画いて入場者に見せる。髪床の暖簾に道灌と賤女を画いて急げ〳〵待せつゝ帰る客を止るゝ。〳〵彼左詩に何吏ゆる意を用ひる江湖上の名稗史杯に殊更に当時流行の大人達ゲ工風のうへに意匠を凝し市中に交る韓信を[illegible]ゝ[illegible]と又案畫ゝ〳〵して新奇を競ふ其中へ魯鈍木領の山白縫を巨田ゲ狩の村時雨謎に出されし歌冬ゝより猶ゝの[illegible]ぬ拙き東西を見捨ゝ[illegible]ぬ難有さに今年[illegible]編を走せ當弥生ゝ三十編ゝを呈贄と是巻ゝ臘月[illegible]旬に稿を祝ゝ世ゝ初刷より初[illegible]ゝと賑ふ初春の發兌ふゝ[illegible]

安政戊午青陽

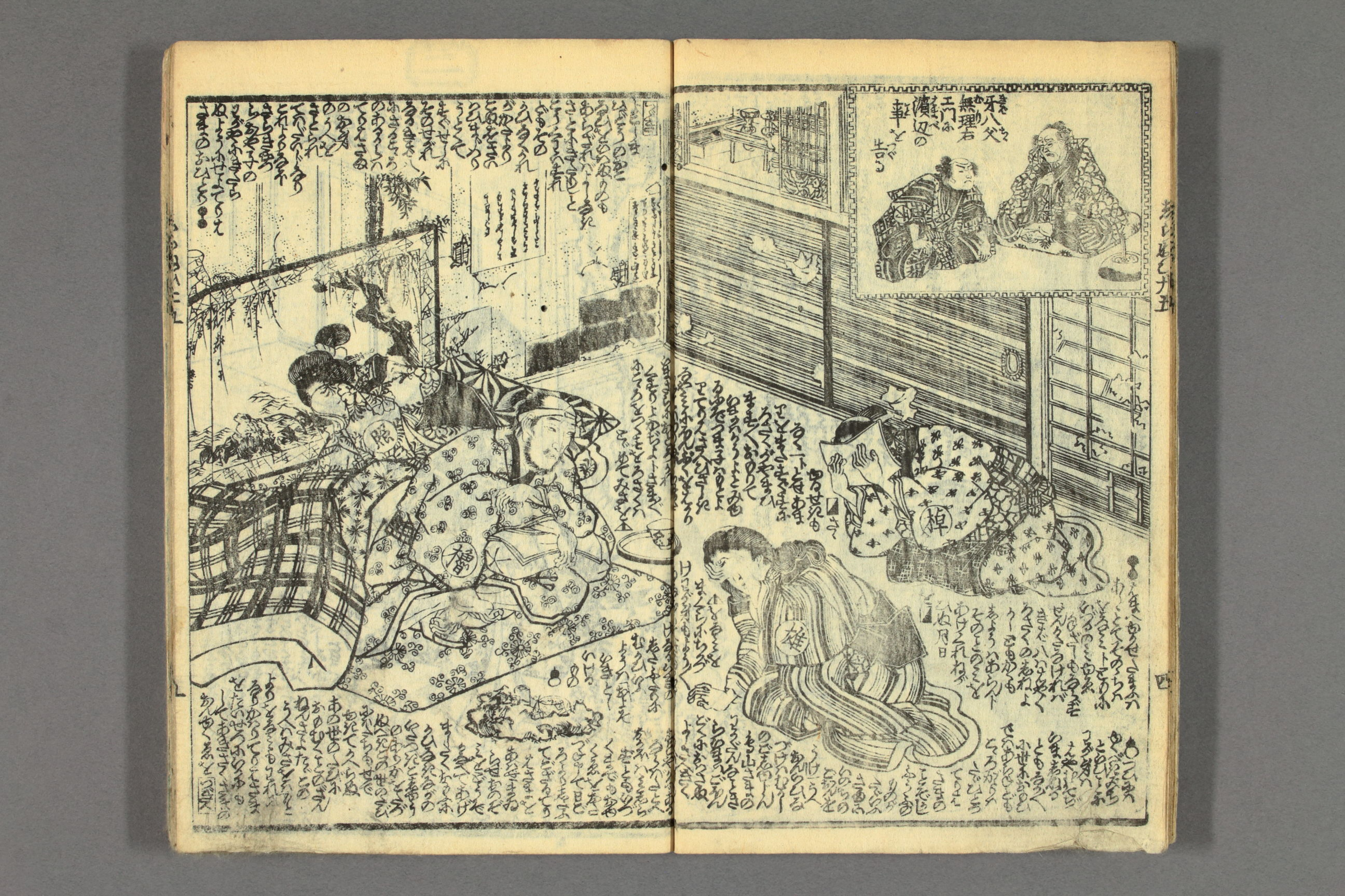
柳下亭種員記

整軒玄魚佛書

石見國高角鴨山柿本社神楽之舞模擬
白嶋渡介
義経妹雄浪
川田朝吉郎
黒潮宇太郎
赤濱砂平
豊国画

オ
雄
照

雄
照

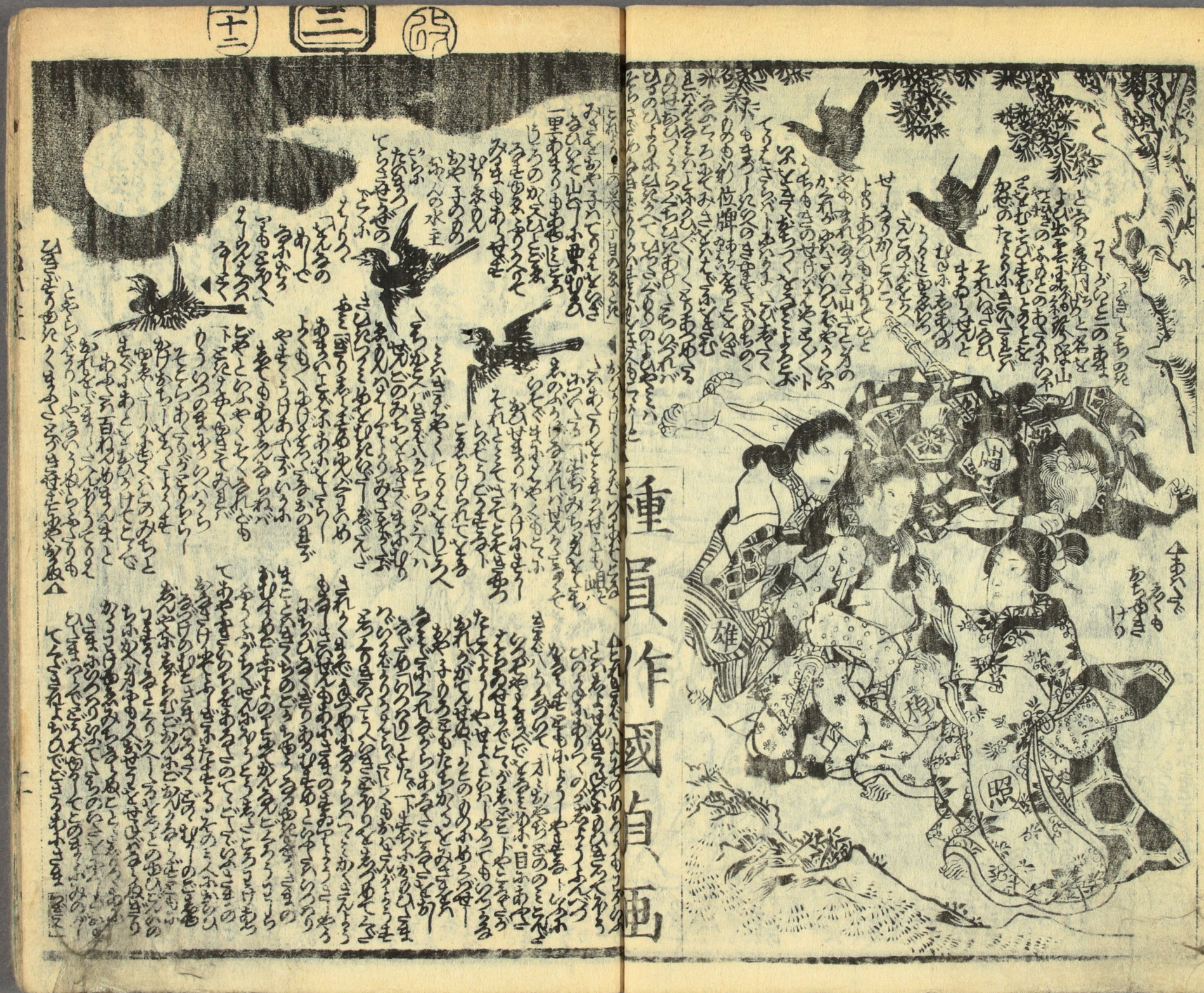


照
雄

雄
昭
理
植

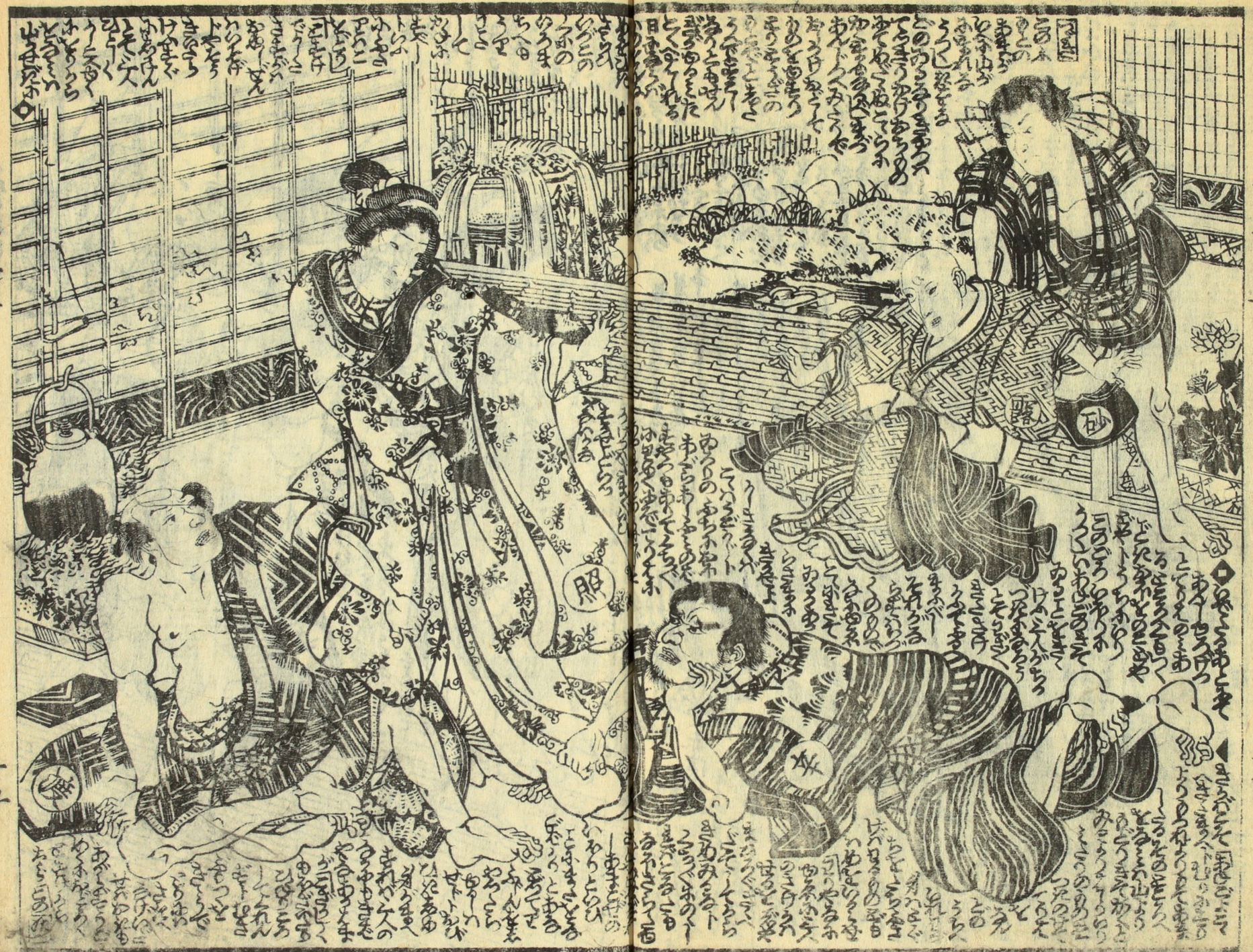
雄
桂
理
子

雑
掉
照
中




種員作國貞画

つゞき
その文中
月の在露
抱せて
若い男と
山の中
赤漢銭の砂糖
白粉
分解


砂
露
服
無
女

雄

照
雄
雌

種員作國貞画


癸亥新刊目録

七草四郎 若菜姫 おくひ潭 四十編 柳亭種彦作 四十一編 四十二編 一恵斎芳幾画

二君に仕へぬ忠臣の功 両夫に嫁まず賢婦の鏡 柳春秋色櫻 初編 山々亭有人作 二編 一恵斎芳幾画

地本草紙問屋 板元 廣岡屋幸助

新製 白粉 梅香 古化粧道具 蒔絵 小引出 ぶら下り りんとう 花形く 人形町 喜久寿 ちごすがめ 菓子 ちごすがめ 法おろい

白縫譚

三十六歌仙畫帖高橋
國貞畫

# 白縫譚 廿六上集

柳下梅蝶

坂新藏

志摩
廿六編上
柳山子梓
外題曲五周紐
嫁飛
空
孤
誇
廿六編下
国貞画
桂園作
寒念佛

四時ふ無聲の鬻物四種あり。春ハ午祭の太鼓賣夏ハ延命散賣秋ハ虫賣冬ハ京師ふのみ限り。空也寺の鉢扣茶筌賣とハ何人の考へしやらん。古よりいふとなるふ。當今ハ其他ふも。呼ぶ所ろ活業ゞ出来街頭ゞ宝鐸ゞ驛路鈴ゞ鳴バ町飛脚ゞ通行と誰も必定しる。是ハ四季にかゝらぬ或時ハ便士と替名ゞつゝく遊女町の狀文をもあつゝかへ。戀雜爰ゞものゝやゝのゝべき稗冊も近世まで稲荷祭の太鼓と共ふ多分ハ春賣とこのゝしゞらつゝ不斷の東西とハなりぬ扨此編ハ虫賣の時恵襁や秋作と照葉が不計再會より智月ゞ吟と欲きて幽靈ふ水のまゝせゝ鉢扣それ冬の夜ふ松代ゞ亡魂ふ導ゞ清光尼ゞ吏條さ人話說定齋賣の來夏の上梓いゝふ時を不嫌とて。あまり季候ふ違ひ出ぬまバ風鈴捷歩を雇ゝ開版を東府四里四方の看官ふ告ゞ思ふ意をそのまゝ舒詞ふ誌

安政戊午林鐘

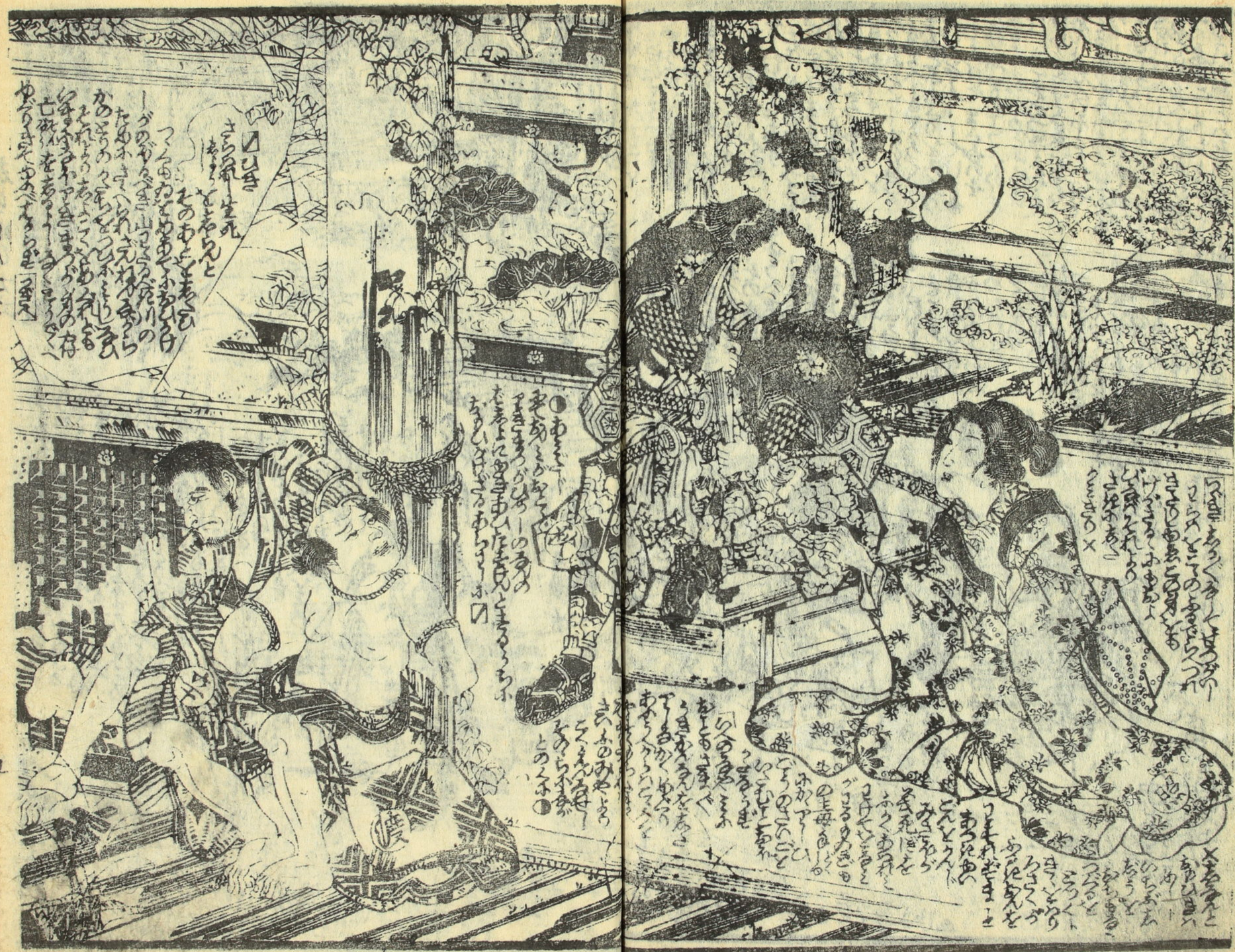
柳下亭種員

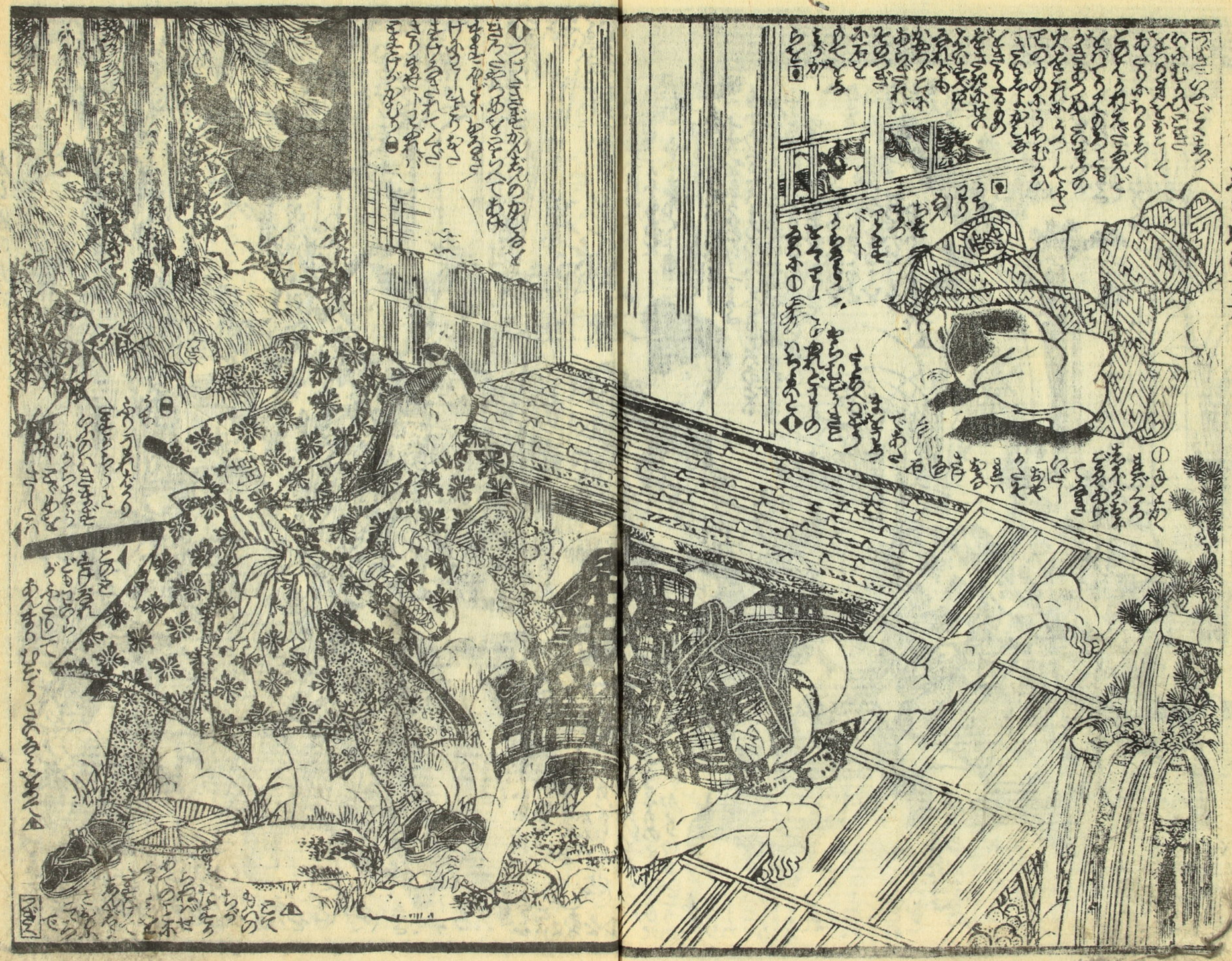
妾白梅の霊
曲亭馬琴
三重山伊達五郎
山蔭玄之丞の首級
玄之丞の妻翠の首級

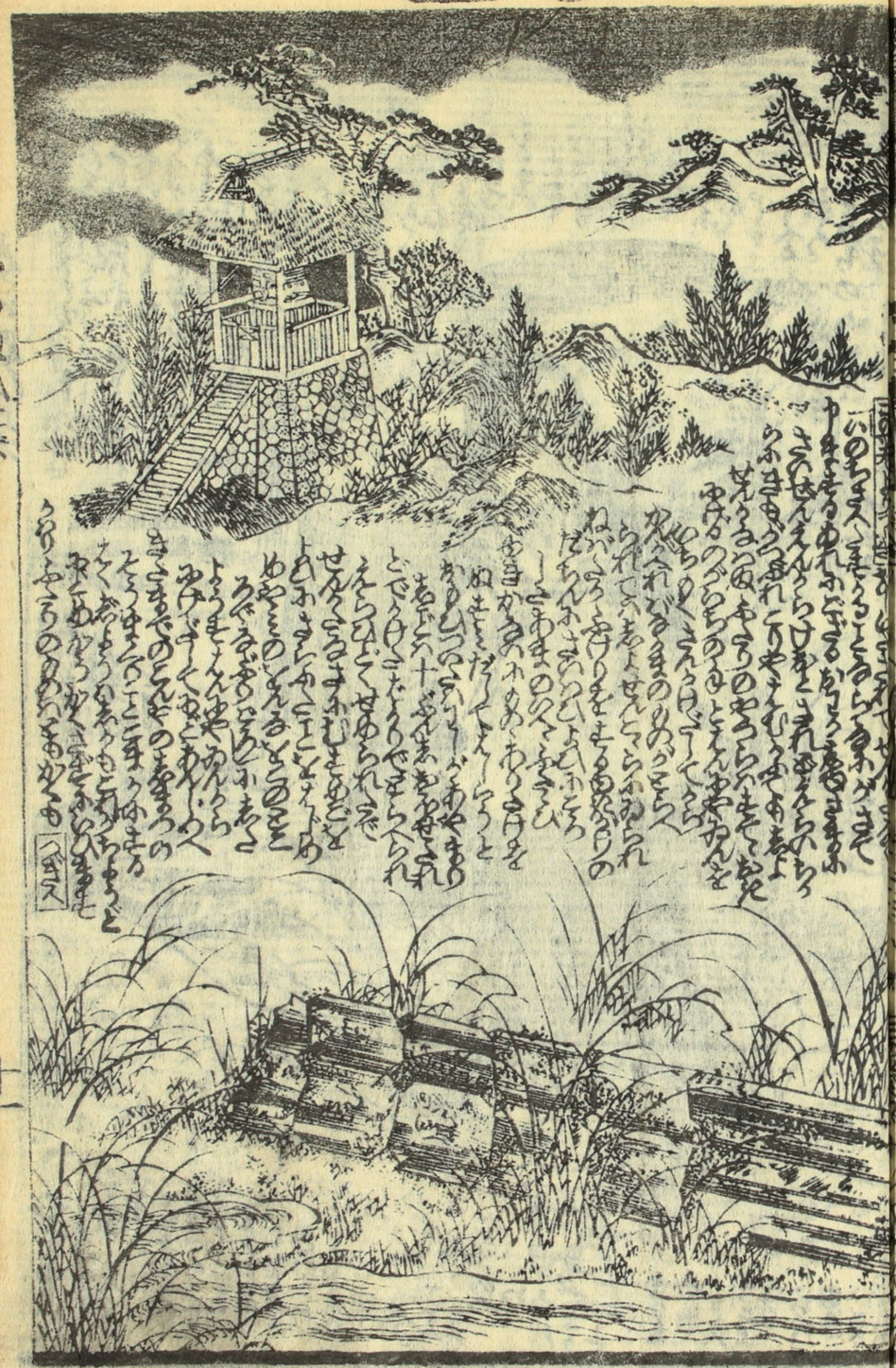
鷲津六郎正辰

曲亭馬琴

九五人

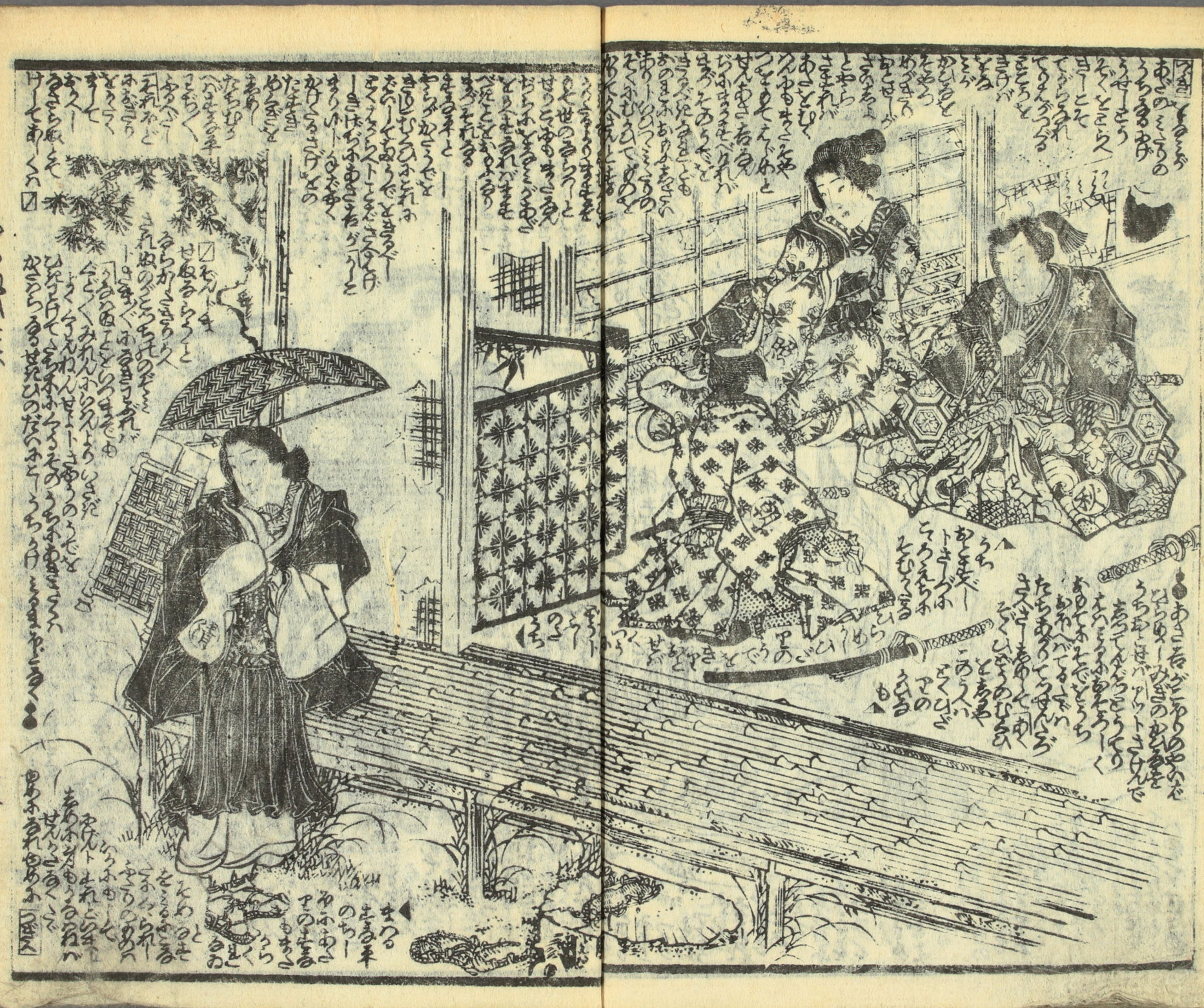


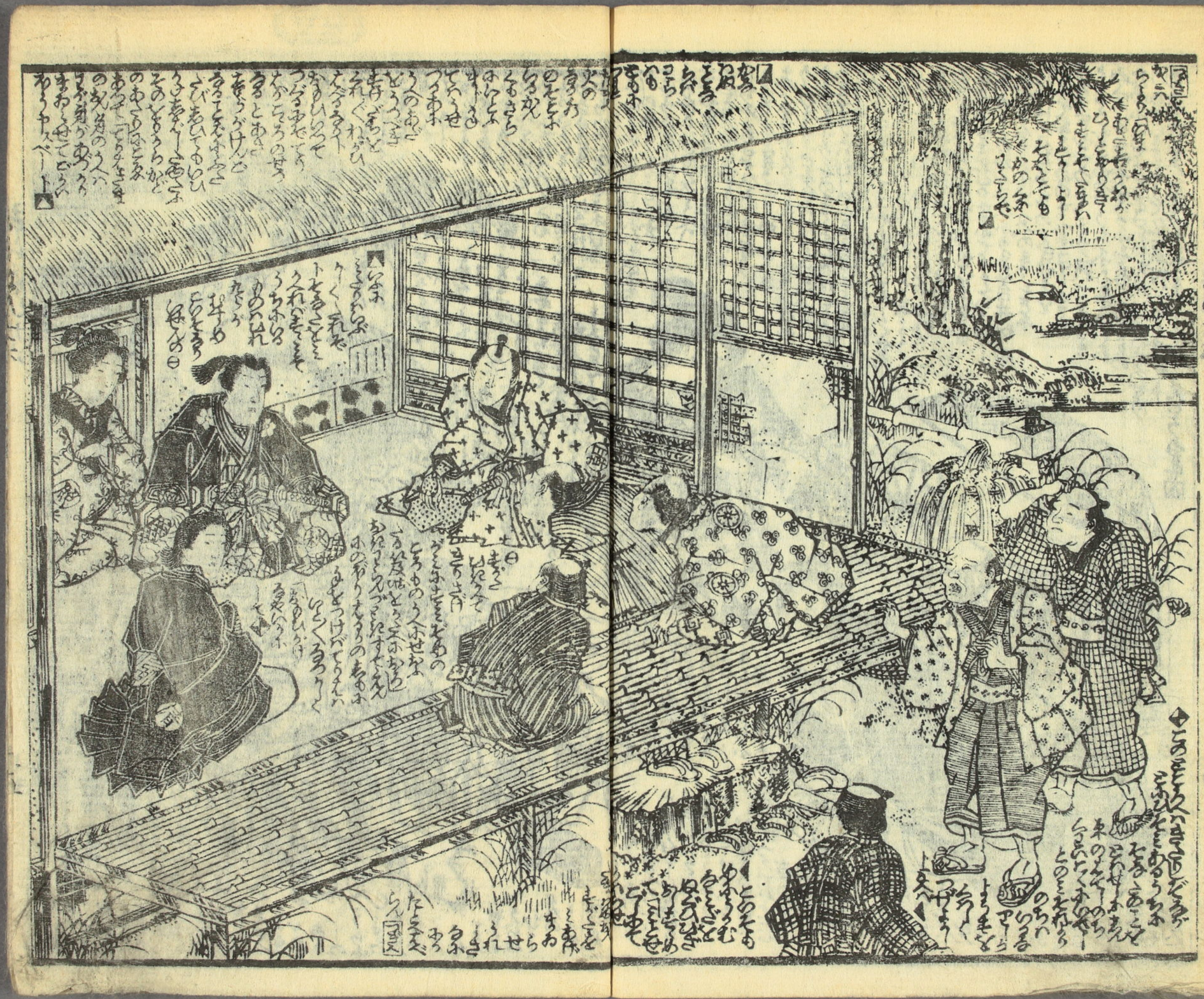




清

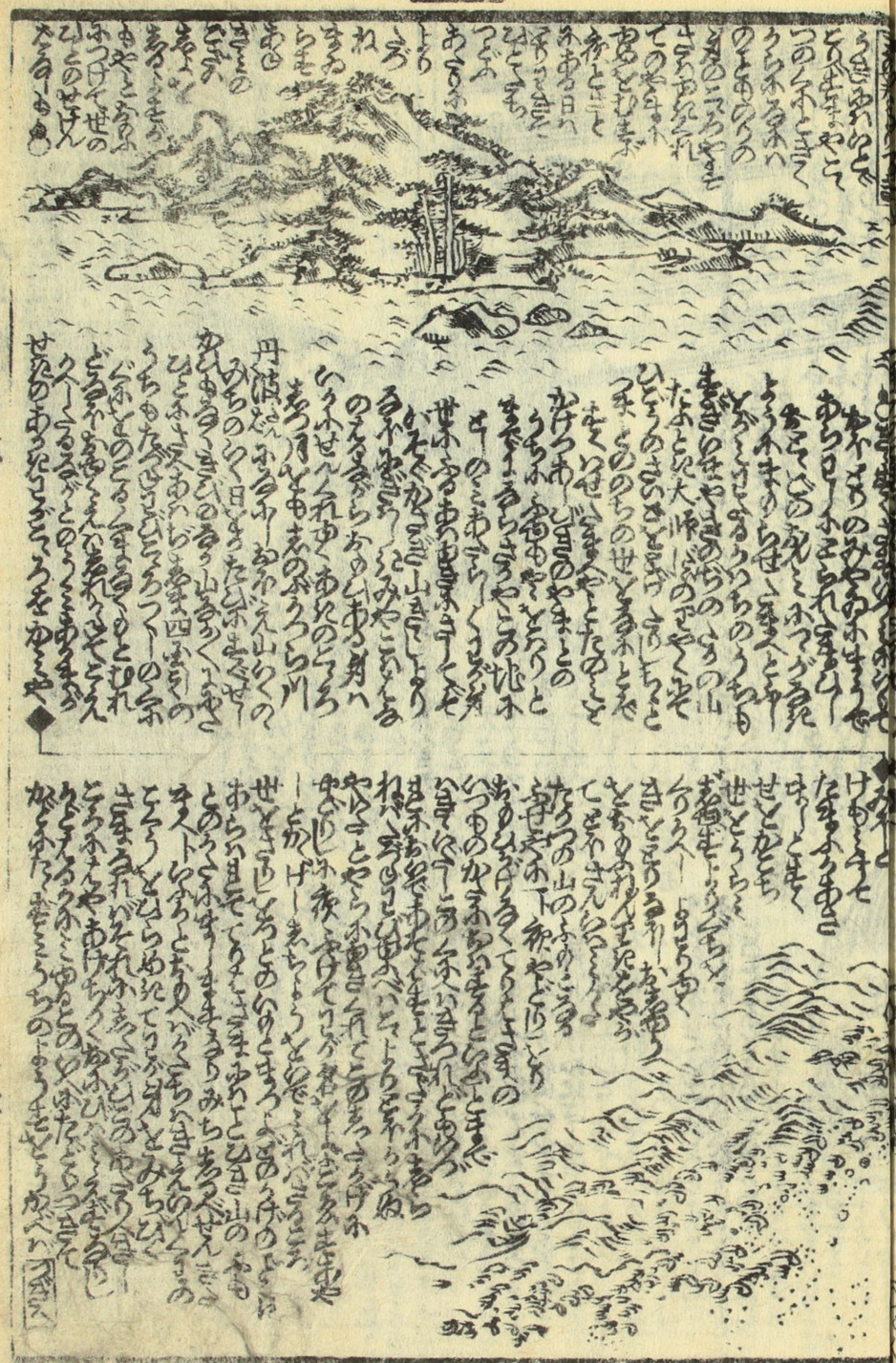
清

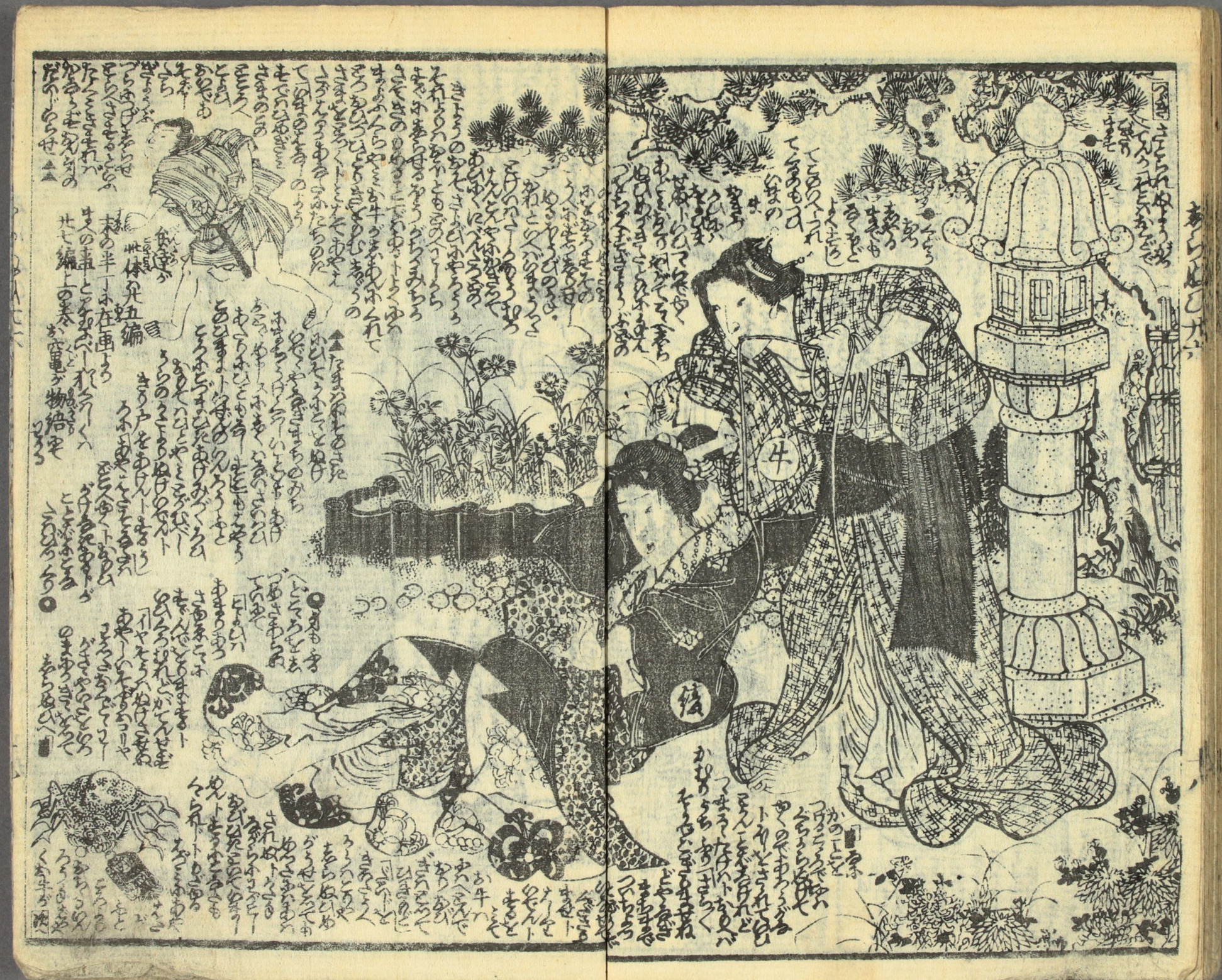


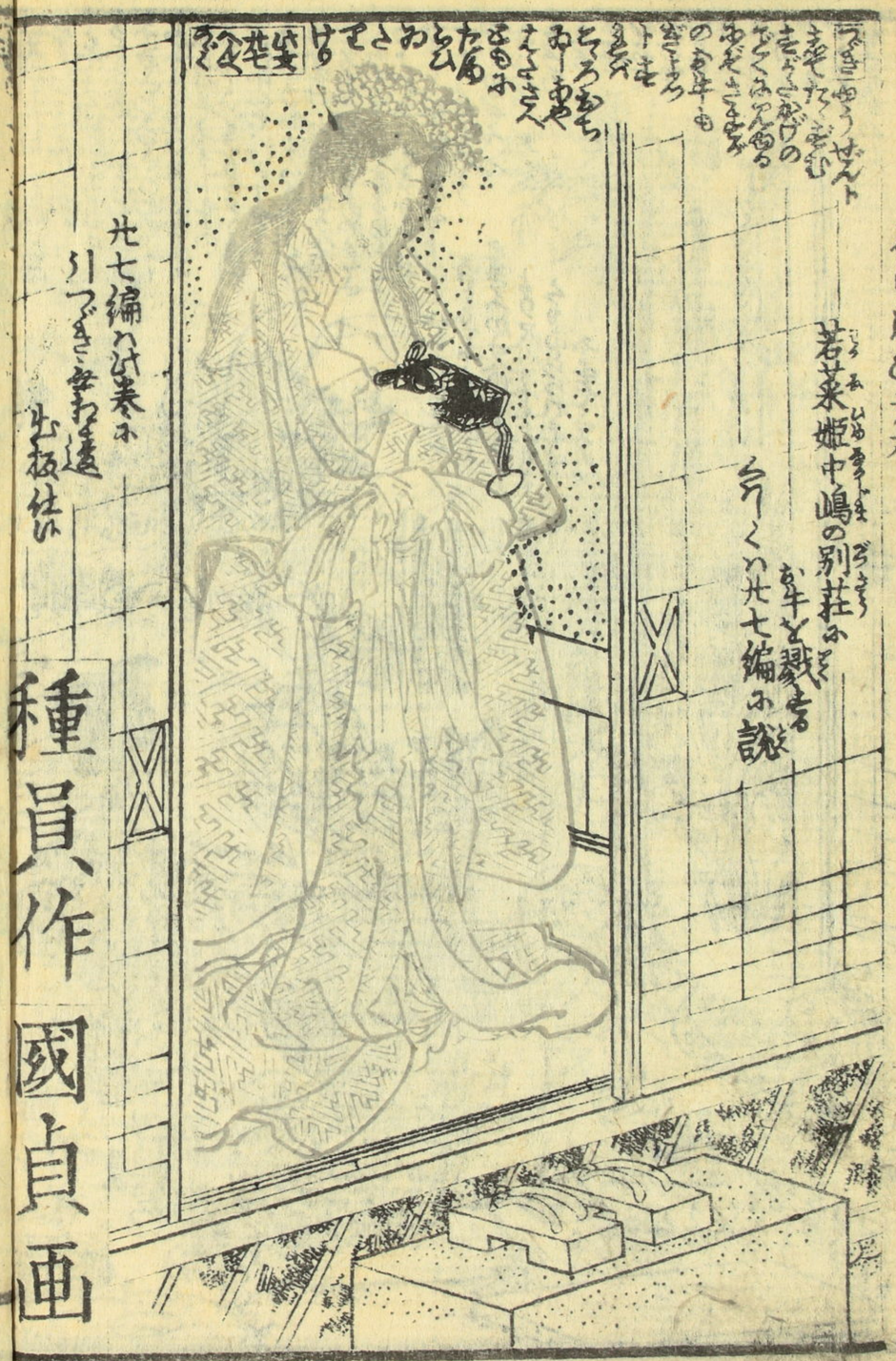


秋作

九州ハ渡て一回の大奇秋ある事ハ後の巻ニ




牛
後




種員作國貞画


七草四郎
若菜姫 ちっ夢ぶ遠 四十五編 柳亭種彦作
四十六編
四十七編 東齋芳幾画

のぶ八大傳 廿八編 假名垣魯文録
廿九編
三十編 朝霞樓芳幾画

一部六冊 かぶ三ぶ 三分ぶ
柳春秋色櫻 山高有人作
東齋芳幾画

地本草紙問屋 深川佐賀町 廣岡屋幸助版